しが国際協力親善大使レポート

塚田（つかだ）　利満（としみつ）さん

隊次：２０１６年度２次隊
職種：障がい児・者支援
派遣国：セルビア

自己紹介

Dragomi je!　Dobar dan.　Ya sam Tosi.（はじめまして。こんにちは。私はトシです。：セルビア語）　ヨーロッパはセルビア共和国の首都ベオグラード市内の就労支援事業所(施設）で活動した塚田利満です。滋賀生まれ、滋賀育ちです。好きなことは山歩きとボランティアです。学校教員をしてましたが、生徒らには夢を心にと語りながらもずっと何もしてないことにひっかかっていて、今回の協力隊活動へのチャレンジになりました。

派遣国、セルビア共和国

東ヨーロッパのバルカン地域に位置するセルビアは、今から 19 年前（1999 年）に隣国との民族紛争からアメリカを中心する NATO 空爆を受けてしまったという国です。やっと手に入れた平和という感覚なのか夕方になると市民はカフェやバーでおしゃべりする人が多く（夏場は夜 8 時でも日は暮れない)、海のないこの国では晴れた日には川岸や湖岸に多くの市民が集まってきます。びわ湖に癒しを求める滋賀県人と似ているかもしれません。一年に四季はあって、夏は暑くても湿気が少ないのでむしろ屋内や木陰では過ごしやすく、冬は積雪があっても翌日には融け屋内はセントラルヒーティングが一般的で、薄着で過ごせます（使用料は通年払い)。日本人にとっての一番の心配事は治安かと思いますが、深夜も女性一人が普通に歩いています。また農業国であることからピヤッツァ（市場）で売られる野菜、果物、お肉は新鮮で安価、私も毎週末に安心して利用しました。

実はこの国は我が国と深い関係にありました。先の東日本大震災でヨーロッパでは一番早くに日本にまとまった募金を送ってくれたのがこの国セルビアであったこと、またそれは民族紛争から NATO 空爆を受けその復興に希望を失いかけていた当時のセルビアに国連の復興支援計画後いち早く支援（発電所や上水道改修、公共バス、医療設備、学校建設等の提供､無償資金協力等)を行なった我が国への市民からの恩返しだったということなど、派遣前の情報収集から得た嬉しい驚きでした。そのセルビアからの募金額は約２億円で、一般市民が市街地の街頭中心に集めたものでした。現在において彼らの平均所得は日本と比べおよそ五分の一ぐらいですから、その当時の市民の熱い思いが伝わってきます。

活動紹介

当初の派遣要請は配属先、知的・発達障害者の就労支援事業所 NasaKuca（私たちの家）

での「商品開発や生産性の向上」というものでしたが、利用者である障害者への関わり方や指導方法に基本的な問題を見つけて配属先と相談する中で、活動の柱を「スタッフの育成・支援」に変えて活動することになりました。まず、取り組んだのはワークチョイスの問題でした。当初、配属先には主に三つの現場仕事がありました。一つはプレス機を使う段ボール加工、キッチンでのサンドイッチやチョコレート製造、そして車でのその配達とランチデリバリーです。利用者である若者らの仕事は日替わりの担当ローテーション制でしたが、それぞれの現場担当スタッフや施設長と約半年の論議を重ねて、誰もが担当の仕事をもち働き達成感が味える担当固定制の導入を行ないました。すると若者らは毎日する仕事に見通しがもてるようになって、以前のように持続への不安で中断・休憩してしまうこともなくその日の仕事に達成感を味わって終えることができてきました。また一方で、当初より障害者の就労支援においては仕事に利用者さんを合わせるのでなく利用者さんに仕事を合わせる、この理念を最後まで伝えました。彼らとの関係を深める中でセルビアの人たちはプライドが高い人が多いことも分かってきて、スタッフと共に活動する中で様々な問題を解決して進んで行く手法は有効であったと思いました。NasaKuca は利用者の保護者が立ち上げボランティアとして支える事業所（施設）だけに、若者が目の前で変わることにははっきりした支持とリスペクトが生まれることも分かりました。

私の活動を終わる日のこと、一人ひとりに別れを告げた後バス停に向かう私に一人の若者が静かにゆっくりと横をついて来ます。その人は施設長の息子さんでしたが、出張で不在の施設長に代わって行動されている錯覚に一瞬私は陥りました。歩きながら私にセルビア語で身振り手振りも使って必死にしゃべってくれます。バス停横まで来ると、もう一度私にしっかりハグをしてゆっくりと戻って行かれました。

セルビアってどこ？　から始まった私の活動でしたが、裕福ではなくとも朗らかで家族を愛し友人との語らいを好むセルビアの人たちはゆとりある暮らしぶりに見え、そして外国人の私も自然に受け入れてもらえ、ここにずっと暮らせたらと思うほどでした。

① 空爆を受けた旧ユーゴ司令部ビル。前を走る「黄色いバス」は日本が寄贈した同型のもの。

②川岸（ドナウ川）に集まる市民

③ピヤッツア（市場）

④スタッフ研修ミーティング

⑤サンドイッチ製造